

(研究会の記録から)

[脇・心霊講座から]

霊魂の世界と人間の世界

……人生にとって現幽交通は有意義 (2)

□内面の世界が霊魂の世界

宇宙の内面の世界、そこに霊魂の世界が明らかに存在しているのであるが、その世界は決して<内面>という言葉によって十分に解明できるわけではない。むしろ、われわれの<周囲>と表現をした方が分かり易いかもしれない。

そして、この大宇宙の一部……この大地球は物質をもって外形は造られているが、その内面には幽界があり、霊界があり、神界がある。すなわち無差別な世界ではないが、階層の世界であるということである。

□霊界は階層の世界

人間は単に肉体だけで構成されているわけではない。肉体の内面に幽体という超物質エーテル体の霊魂の宿と融合して、そこに生命が湧き、人間的活動・活躍が起きるわけである。もし、その人が死の瞬間を迎えると、この幽体は肉体から分離して脱離状態となり、物質的地上界を離れ、霊魂自らが超物質体であるところから、超物質界である霊魂の世界へ移るのである。しかし、霊魂の世界は単一の世界ではない。したがって、地上を去る時の心の内容(状態)に応じた、それにふさわしい世界に一応落ち着くわけである。おそらく、すべての人はだいたい感情の持ち主であろうと考えられるところから、その感情の世界に相応した、すなわち幽界に止まる。

□霊界人の語る死の瞬間と死後の生活

死の瞬間、延いては霊界の生活の真相を知ることが、想像する他はなかろう。ところが、前述のように、幽明交通が可能であり、死者からの通信を受けることは現実に可能なのである。霊界通信がその証拠の一つである。これによって霊界人から直接その真相を知ることができる。その一例として、ジュリアの霊界通信を以下に紹介してみよう。

地上から、この他界へ来た今日で、何が一番に幸福であり、何を経験したかということをおし上げるならば、それは、おそらく、何の苦痛もなく、何の衝動も感ぜず、ただ、気持のよい睡眠からさめて朝が訪れた感覚で他界人になったということでありましょう。

もちろん、地上から、ここへ来る状態にはいろいろなことがある。苦痛を伴っても、いつまでもこの苦痛は伴わないものです。ですから、まず感じられることは、休息と安心と、平和という感覚です。

死……地上一般の人々に、これほど誤解の多い文字はないでしょう。ことに悲しむことにおいて、予期されていないときほど強いものではありません。けれどもそれは大きな誤解なのです。

まず、肉体についての誤解は、死はいかに苦痛を伴うものかということです。ところが、丁度衣服が肉体からすべり落ちるように、後にのこされる身体から去るのです。そして気持のよい目覚めが得られるのです。そこで感じられることは、「喜び」なのです。それを例えると、悪夢から醒めたように、そして、それがただ夢であったことを知ることと同じように、死というものが、やはり、単純に、自然に感じられるということ、これがすべての人々の経験のようであります。だから死んだことが、自分ではなかなか信じられません。実際、死んでいないというのが事実だと思っている人たちも多いのです。実際、彼ら死者は、よく見えるし、聞こえもするし、何処へでも行ける。万事が今までの通りなのですから。

しかし、そうこうしているうちに、精神上の変動がおきます。

「自分はどうやら死んだようだ。これが死というものか。けれども事実、死というものはないのだ」。

この自覚で、地上のありしときの想像とは、全然違っていたことが考えられ、生命は、肉体とともに死というものによって終わりをつげるという想像が、次第に単なる想像でしかなかったことが分かり、地上に生存していた時は、自分というものが全部発揮されていなかったということが、ほのかに分かってくるのです。人間は向上の一路を歩んでいる。人は前進して止まるものではない。眠るが、必ず目醒めるものです。

これらの他界での覚醒によって、通常以下のような経験をすることになる。それは、人は死後、自ら自身で、目覚めるものだ。それには他人の助けはいらない。目覚めた時に、自分は、生前の自分と同じ自分という存在であると自覚する。そして男性は男性、女性は女性、幼児が目を覚ませば、やはり幼児であり、老人は老人のままなのです。

もしもこうしたことでなければ、自分を失ったと考えていただけに、この目覚めを他の肉体が、何かに宿ったと、まちがえて考えるかも知れません。

要するに、死後はいわゆる死後ではなく、生前と同様であります。

死後、その人の個性は決してなくなり、欠如もしないのです。

言い換えれば、地上から、あちらの世界（霊魂の世界、エーテル界）へ引き移ったに

過ぎません。

しかし、いずれはこの世界からさらに次の世界へと引っ越しの旅をするのです。これが霊魂の本質です。これを向上と言い換えることができます。

(註) 死の瞬間の感想をのべた霊界通信は非常に多い。このジュリアの通信は、その代表的な一つであり、霊魂の世界を旅し、その過程にはいろいろのことがあると述べており、その通りである。

ここでわれわれは、「死後個性の存続」という意味を、1) ただ存続して永遠の生命を継続するということだけの霊魂である。それが霊魂の本質ものであり、また、実際において、それだけの存在の霊魂であると考えてはならない。また、2) 霊魂の世界と、地上界とは、独立した別々な存在であると考えてはならない。

(つづく)